

山中新著
馬なし馬車が行く



馬なし馬車が行く

山 中 新



中央大学出版部

やま なか あらた
山 中 新

1940年、東京に生れる。

1966年から7年間、フリーランサー

として、主としてヨーロッパ、ア
ジア、北アメリカで取材。

帰国後、CM出版社編集長を経て、
現在フリー。

連絡先

東京都千代田区飯田橋4-7-6 曙ビル

(株)現代企画

TEL 03(263)5648(代)

馬なし馬車が行く

1984年1月10日 初版第1刷印刷

1984年1月20日 初版第1刷発行

定価1,500円

著 者 山 中 新

企画・編集 (株)現代企画

発 行 者 桃 井 直 造

発 行 所 中央大学出版部

東京都八王子市東中野742-1

電話0426-74-2351 振替東京8-8154

目次

気構えと目敏さの時代

音五郎の四十一日間の車捜し 3

馬なし馬車の話 14

外人商館と自転車屋 19

乗合自動車と馬車屋の闘い 25

国内組立自動車第一号 30

国産蒸気自動車を走らす 38

肌は真珠か宝石か 47

若殿様が自動車で村にやってくる

61

混乱と模索の時代

警視總監、自動車に試乗 68

音五郎と馬車屋たち 72

陸軍、自動貨車甲号を完成 84

音五郎の夢を託して 91

先駆者橋本増治郎とダットサン

100

技能者の帰郷 109

凸坊は帰らず 116

技術者の友情 124

ああ、お抱え運転手 137

貨物自動車とキツネつき 144

音五郎の決断 161

関東大震災 174

ぶどう峠を越えて 190

患者自動車 204

音五郎の引退 214

戦争と廃虚の時代

ノモンハンに散った自動車部隊 223

捨てられた人びと 233

ガード下の技術者 250

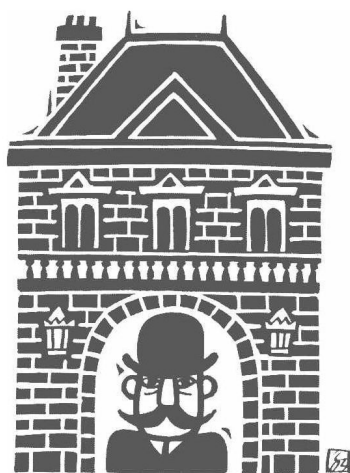
馬車屋の復活 265

G H Qを訪ねて 273

いまだ馬なし馬車になれず 283

——あとがきに代えて——

気構えと目敏さの時代



音五郎の四十一日間の車捜し

新潟で偶然知合った洋行帰りの旅人から、パリや倫敦の街々を走っている、自動車という新しい乗物の話を聞かされたとき、中石音五郎は、大きな感動と興味を覚えると同時に、その新しい乗物である自動車というものが、やがて、日本で大流行するだろうと直感した。

その旅人の話とは――

欧州では、どこの国の都市へ行っても、自動車という新しい乗物が走っていた。この自動車というのは、乗合馬車から馬を取った車体のようなもので、馬の代りに、動力となる機械が車体のさきつばに付いていて、その機械の力で車体を走らせていた。

車体の中には、手綱の代りに、御者台にハンドルといって丸い輪の把手が付けてあり、それがかじとりになっていた。その把手を回すことによって、車は右に左に自由に道路を曲ることができるようになっていた。速度は、馬の数倍も早く、餌もいらぬ。その代り、瓦斯^{ガソリン}という油が要るそうだ。それに、危険なときには、車を即座に止めることができるような制動装置も付いていて、安

全な乗物に作られていた。

私も、この自動車という新しい乗物に乗ってきたが、最初は背後から押されるような軽い衝撃を感じたが、馴れてくると、頬を打つ風がとても気持ちよかった。

この旅人の話を聞きながら、音五郎は涙が止めどもなく流れた。

音五郎は、このときのことを、「人というものは、感動して興奮すると、不思議なことに、自然に涙が出てくる。このような経験は、人の一生の中で、一度あるかないかだ。これは、私だけではない、誰だって経験することだが、この感動と興奮だけは、いつまでも大切にしたいものだ」と、後々にいたるまで、会う人ごとに話している。

音五郎は、明治三年（一八七〇年）、越後（現在の新潟市）に生れ、明治三五年（一八九二年）、二十二歳の若さで大八車、人力車、馬車などの製造を手がけ、この頃は車大工の親方になっていた。音五郎が旅人から自動車の話を聞いたのは、文明開化の大きなうねりのまっただ中の、明治三二年（一八九九年）の秋、音五郎が独立して七年目のことであり、人柄のよさも手伝って、業績も伸びてきていたときであった。

この頃、東京には電灯が灯り、洋髪を結った若い女性が街を闊歩していた。また、自転車に乗ったハイカラさんも目立ってきて、街中がどこもなく新しい時代を感じてきていた。そんな時代の中

で、新しい産業へと人びとの心が向けられ、気構えと目敏さが養われてきていた。

この年、初めて自動車がアメリカから輸入された。

史実を読むかぎりでは、最初に上陸した自動車は、日本中を騒がした例の陸蒸気（汽車）のよう
な華かさはなかったようだ。

翌明治三三年の初夏、音五郎は「動物以外の力によって、道路を馬車よりも早く走る乗物を見た
ら、手数でも知らせてほしい……」と、自動車とは書かずに、まずは東京にいる友人知人に、情報
依頼の手紙を書いて出した。

この手紙を受取った幼友たちで、同じ車大工の田中は、

「おれのところへ意味のよく判らぬ手紙を中石がくれたが、どこか身体の容体でも悪くなったの
か」

と、音五郎のことを案じて、新潟にいる自転車屋の小山に、問合せの手紙を出している。

ところが、その年の秋、東京市中に、音五郎の手紙を裏付けるような噂話が広まってきた。

皇太子殿下（後の大正天皇）と九条節子姫とのご成婚が、二月一日の紀元節に発表された（式

は五月一〇日）。そのご成婚を奉祝して、桑^{サンフランシスコ}港の在留日本人会は、領事の陸奥広吉伯爵の手を経て、電気自動車一台（価格約三万円）を宮内省へ献納する手続をとった。

献納車の輸送納入方は、高田商会という機械商があたり、献納車は無事に青山御所に納められ、六月中旬に試運転を行うことになった。しかし、当時、日本には自動車を運転できる技師が一人もいなかった。宮内省は、鉄道院（現在の国鉄）に依頼して、同院の技師の中から優秀な機関士二人を選んでもらい、高田商会の広田精一を補佐役として、試運転を行うことになった。

さて、出発時には何事も起らなかったこの車が、紀之国坂まで来たとき、機関士が運転を誤り、献納車をお濠の中へ転落させてしまった。二人は「これは大変なことになった」と、宮内省にお伺いを立てた。宮内省からは、人も献納車も無事だったので、別になんのおとがめもなかったが、「このような危険な乗物を、皇太子の御料車とするわけにはいかない」と、皇居の倉庫にしまいこんでしまった。

事件はこれで「一件落着」というところだったが、どこから漏れたのかこの話は、東京の下町で噂話となって広がっていった。

この噂話を耳にした田中は、早速音五郎に手紙を書いて、その一部始終を報告してやった。

一方、新潟の音五郎は、友人や知人に手紙を出したものの、日増しに自動車への思いが募るばか

りだった。東京にあてた手紙の返事は、まだ誰からもこない。音五郎は、新潟の市内で出合う人にさえ自動車の話をし、そのあとで必ず「自動車を見た人の話を聞いたら知らせておくれ」と頼むのだ。こうなると、直情型というよりも、自動車にとりつかれた病人と同じである。

こんな状態の音五郎のところに、東京の田中から一報が入り、その内容が自動車のことだったので、音五郎は手紙を持ったまま街の中に飛び出し、「動物の力に頼らず、道路を馬車よりも早く走る、自動車という乗物を見た人がいたんだ」と、狂ったように走り回った。

田中からの手紙こそ、音五郎が千秋の思いで待っていたものだけに、それは大きな喜びだった。音五郎は、その日のうちに東京へと旅立った。一説では、音五郎は、寝ずに歩いて、新潟から四日と半日で東京に着いたという。小柄で色白の、一見おとなしそうな音五郎のどこに、そんな情熱があったのかと、この話を聞いた町の人たちは、音五郎の韋駄天ぶりに呆れ驚いたという。

音五郎は、東京に着くなり、一直線に田中の下宿を訪ねた。そして、田中の顔を見るや否や、手紙に書いてあった噂話の出所を訊ねた。

「噂があると書いただけで、おれが自動車を見たとは書かなかったぜ……」

田中は、音五郎の気配に圧倒されて、ぼそぼそと言訳したが、音五郎は、田中の言訳など聞こうとしなかった。

「噂には出所があるはずだ。お前に話をした人をおれに紹介しておくれ、お前には手数料をかけぬか

ら」

音五郎は、田中の手をしつかり握り、頭を下げて頼んだ。田中は困惑するばかりだった。

「中石、勘弁しておくれ。もつとおれ自身が調べてから、お前に手紙を書くべきだったんだが、とりあえず一報をと、軽い気持で書いてしまったんだ。噂話の出所を聞かれても、街の銭湯で聞いた話を、どうやってお前に紹介できるんだ」

田中は、音五郎に話の出所の説明をしながら、これほどまでに思い詰めている音五郎に、本当に気の毒なことをしてしまったたと、心の中で悔いていた。

「とにかく、今晚おれをその銭湯に連れて行っておくれ、お前にその噂話をした男を教えるなどとは言わないから」

田中は黙りこんでしまった。音五郎は、とりつく島もなく、力なく畳の上に寝ころんだ。呆然と天井を見つめていた音五郎の心の中に、このとき、よし、どんなことがあっても、たとえ東京中を歩き回っても自動車を見つけてみせるといふ決意が、もくもくと湧いてきた。

その日のうちに宿泊先を芝の越後屋という旅館に移した音五郎は、女将おかみに弁当を作ってもらうと、それを腰にぶら下げて、街へ自動車を捜しにでかけた。三日もすれば諦めるだろうと思っていた車捜しが十日も二十日もつづくと、傍にいる女将も何かと気を遣ってくれる。そんなことは一向に構わず、音五郎は、旧江戸市中八百八町を歩き回った。だが、音五郎のめざす自動車にも、またその

自動車を見たという人にも、会うことができなかった。日時だけが日めくりをはがすように過ぎていく。田中からも情報は入ってこなかった。一か月も過ぎると、懐中の金子きんずも底をついてきた。外は明方から降り始めた雨がまだつづいている。街に出ていくこともできず、廊下に寝ころんだ音五郎は、雨によって池の水面にできるいくつもの小さな波紋を見つめながら、この雨さえ降らなかつたら、今日は街で自動車を見ることができたかも知れないと、明日に延びてしまったチャンスを残念がるのだった。明日は自動車が見られるという保証はなにもないのだが、ただそう自分に言いかけ、信じるだけなのである。

外出していた女将が戻って来た。庭の踏石で、雨下駄についた泥をせわしく落しながら、

「音さん」

と、廊下で横になっっている音五郎に気がつかず、玄関先で呼んだ。

「ひとの姿も目に入らないようでは、もう年だね」

音五郎は、玄関先まで来て女将を茶化し、玄関の板の間に腰を下ろした。

「なに言っただい。音さんのために、雨の中を、わざわざ車捜しに行つて来たのに……」

女将は、肩にかかった雨水を手拭いで拭きながら、板の間に腰を下ろしている音五郎の顔を見た。「そ、それで、車はあったのかい」

音五郎は、せきこむように女将に訊いた。自動車の話になると、音五郎は、とたんに水を得たカ

ツパのように生き返る。それまでは、目もうつろで、自動車にとりつかれた夢遊病者のような顔をしていたのに。

「音さんの捜している自動車とかいう乗物のことなんだけど、走っているのを見た人がいると聞いたんで、行つて来たんだよ……」

「それで、その人に会つて来たのかい」

女将がまだ話し終つていないのに、音五郎は生つばを飲込むように訊いた。

「……だから、行つて来たと言つてるでしょ」

女将も意地が悪い。音五郎をじらした。女将の話によると、新橋で自転車屋をやっている浜口という男が、日比谷公園のお濠端のところで、自動車を見たということだった。

音五郎は、女将から自転車屋のある所を聞くと、傘をさすのもどかしげに旅館を飛び出し、その自転車屋を探し訪ねた。ところが、浜口からは、音五郎が期待するような詳しい話は聞くことができなかった。江戸っ子の口ぐせの「アノー、ソノ、ダロウ」ばかりで話にならない。音五郎は、新橋からの帰りに、芝の電信局に寄り、新潟の自分の家に「○ナク、クルマミエズ、○オクレ」と電信を打ち、肩を落しながら旅館に戻つて来た。音五郎の留守の間に田中が来て、カステラを置いていったと、お手伝いさんからカステラの包みを渡されても、「そんなものいらんよ」と機嫌が悪く、自分の部屋に閉じこもってしまった。

畳の上に大の字になって、あれやこれやと考えているうちに、音五郎の頭の中に妙案が生れた。それは、ただろうろと街中を歩くのではなく、一か所に腰をすえて、自動車の通るのを待つてみることだ、この方法だとお金もかからず、身体も疲れない。

音五郎は、翌日から、気持を新たにして、腰に弁当をぶら下げ、馬場先門のお濠端へ行き、草むらの中に身体を隠すようにして横になると、道路の方をじっと見つめ始めた。

こんな毎日が十日もつづいた昼のことである。お濠の草むらから、いつものように顔を覗かせて道路の方を見ていたとき、音五郎は、警ら中の巡査に不審尋問され、そのまま日比谷の巡査派出所へ連行されてしまった。

「もう十日近くもお濠端でなにかを窺っているようだが、貴様はなんの目的で毎日そうしているのか、正直に本官に言ってみろ」

音五郎を連行した巡査は、厳しい表情で音五郎を問いつめた。音五郎は、馬ずらのような、真黒い顔をしたこの巡査に、

「動物以外の力によって、道路を馬車よりも早く走る車を捜しに来ているのです」

と説明した。巡査の厳しい表情の中に笑いが走った。その笑いから、音五郎は、自分の言っていることが、巡査に通じていないことを知らされた。

「本官は、ここで十年も巡査をやっているが、そんな夢みtainな乗物には一度も会ったこともない